

コンサートへボウのオーボエ（オランダ旅行記）

＊

日下部芳志●日下部皮膚科（小田原市）

平成26年秋、学会絡みでオランダのアムステルダムへ行って来ました。ヨーロッパはいつも日本より冬が早く来るイメージだったのですが、幸い小春日和に恵まれました。今回は少し奮発してアムステル川河畔の良いホテルにした所、到着した夜に窓から素晴らしい月が迎えてくれました(写真①)。無知を恥じるのですが、アムステルダムとは、「アムステル川」を「ダム」で堰き止めて出来た所との意味と現地で知りました。凡そ40年前と、30年前にもここに来たこと



写真①アムステル川に映える月



写真③2014年のダム広場。ハトが戯れ観光客もまばら

はありましたが、40年前に来た頃、市の中心のダム広場の前は、各国のヒッピーに埋め尽くされていました(写真②)。しかし今は、ハトがパラパラいるだけで(写真③)なんとなく寂しい感じを受けました。30年前には夫婦二人で来て、風車や黒胡椒入りチーズに感激していました。今回は、学会ついでに美味しい物に出会え、印象に残る絵を見て、もし運が良ければ何か小さな良い物が購入出来れば等と、夢見て来ました。これは、後になって知ったのですが、この時既に別行動の先生方の中に、スキポール空港で盗難に遭い、パスポート、貴重品等を無くされてしまった先生がおられました。気丈な彼は「さすが天下のスキポールだ」と豪語しておられました。

さて、私の方はと言いますと、美味しい物は、最初の晩のトマトのスープと最後の晩のシーバスで叶えられ、絵はと言うと多すぎて印象がぼけてしまいましたが、やはりレンブラントの「夜警」、ゴッホの「馬鈴薯を食う人々」、フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」か、まあオランダに来て一つに絞るのは無理な相談でした。しばらく、学会も順調に経過すると、せっかくアムステルダムに来たのだから、運河クルー



写真②1976年夏のダム広場にて。中央左に筆者

ズとかアンネの家へ行けとか、夜はオペラやオーケストラも良いものやっていると勧められました。

まずアンネ・フランクの家、カナダの先生方と2時間近くは並びましたが、入ってその広さに驚きました。40年程前に行った時の記憶は、「暗く狭い急勾配の階段を上って、そっと覗いた狭い屋根裏部屋」という印象でしたが、今回見ると、十分広い空間に思えてしまい、思わずそれを口にする、家人から「苦しかったのは、その狭さではなく、自由の空気を吸えなかったことです」と釘を刺されてしまいま

した。その通り、ジャーナリストになる夢を絶たれた事もさぞ無念であったでしょう。もう一つ、今の歳になって私が内心感心したのは、アンネの父親オットー・フランクの周到な時代の読みと準備でした。翻って、今の自分は大丈夫だろうか、と。

オランダと言えばチューリップと、運河と跳ね橋(写真④)。花市場に行きたいと言う家人に付いて行くと、そこは運河沿いで、花々で溢れかえっていました。税関の事があるから球根は空港で買う事にし、近くの半地下のレストランでお好み焼き風の物を食べ、少し歩いて、街中をさまよっていましたら、西洋骨董屋が有り、18世紀の船乗りが絵を掘ったセイウチの牙と、持ち手に石で兎の顔が彫ってあるステッキを購入しました。その骨董屋さんの留守番をして居られた高齢のご婦人も、兎の頭を撫でながら、「お前が日本に行くのね」と。大切にすると約束しました。

さて、コンサートホールとして名高いコンサートヘボウへは一度行ってみたいと、コンシアージュのダンカン氏にお願いしておいたところ、「今情報が入り、丁度切符売りの所で良い席を譲りたい人が待っているから行ってみなさい」と言われた。劇場からの情報だろうか、すぐ直行したところ、切符売り場では「立見席しか無い」と張り紙がしてありました。売り場の方が目配せして、「あちらの方に聞いてみなさい」と。そこには初老の品の良いご夫婦が座っていました。家人がすかさず聞いてみると、その方から素晴らしい席を二つ譲って頂きました。ダフ屋みたいな人が待っていて、ふっかけられるのかと内心、心配していましたがラッキーでした。このClaude HUMBERTJEAN (クラウド・ウンベルジャン) ご夫妻とは後日、美術館の食堂でも再びお会い出来て、フランスのナンシーから来た方で、一緒に来る予定の友人が来られなくなり、私たちに幸



写真④マヘレの跳ね橋。夜には電球に飾られ光輝く

運が無い降りた事が判りました。

コンサートヘボウ(写真⑤)は素晴らしく、ロイヤル・コンサートヘボウ・オーケストラと Alexei Ogrintchouk (アレキセイ・オリントチョク?) のオーボエ演奏でした。アレキセイの「ストラウスのオーボエコンチェルト」の演奏は正に神技で、絶句して全身に興奮が走り、始めから終わりまで、酔いしれてしまいました。

運河クルーズは小一時間で、アムステルダムを回るすばらしいもので、夕暮れに輝く所も美しく、ターナーの絵画の様でした(写真⑥)。この帰り道の運河沿いは、一般人のランニングコースになっているらしく、信じられない程多くの人々が行き交い、しかも、そのどの人々も、素人とは思えない服装と体型でありました。冬季オリンピックでメダルを独占していたオランダの底力を見た思いがしました。

昔は人種の坩堝を思わせるヒッピーと称する怪しげな若者たち(自分もその中の一人ではありましたが)で溢れかえり、御世辞にも健全とは言えなかったイメージのアムステルダムでしたが、その印象は40年の年月を経て一変しておりました。帰国する頃、新聞でエボラ出血熱の患者さんが米国で一人発症したと報じられていました。緊張しながらの帰国でした。



写真⑤コンサートヘボウ内。本番前にて写真可



写真⑥夕暮れに染まる空と輝く運河

おどろきモモの木クリニック・パートXX(涙、涙の最終回)



宮本秀明●宮本皮フ科（横浜市磯子区）

1. 倒産しそうで、しなさそうな某皮膚科

「患者受けしそもない某先生」と評判の某クリニックは、今日も閑古鳥が鳴いている。開院以来、従業員はあまりのヒマさに耐えかねて続々辞め、再度雇っても次々に辞めていった。某先生は「患者受けしそもない」だけでなく、実は「従業員受けもしない某先生」でもあったのだ。しかし「従業員に払う給料が減った分、働かなくて済む」と訳のわからぬ計算をして、一向に慌てる素振りもない。「どうせ患者は来やしないのだから」と有料の広告はおおかた取り止め、見積書を見て「高い」と呟き、窓看板を外注せずに暇に任せて自作したり、コピー機のトナーを再生品に変えたりと経費節減には余念がないが、患者を増やす意欲はまるで無い。

何か趣味でもあるのかと思いきや、ゴルフ、釣り、野球、サッカー、麻雀、囲碁、将棋、ガンダム、ニンテンドー 3DSにも全く興味を示さない。AKB48、メイド喫茶、キャバクラ、初音ミクにも飽きたのか、購入1年後に生産中止になった、速いのだけが取り得のマニュアルシフトの国産スポーツカーを駆って、黙々走り廻るのみである。この愛車はロータリーエンジン故に燃費だけはポルシェ並み（ハイオクでたった5 km/L！）なので、併走するハイブリットカーを横目で見ながら「燃費をとにかく言う人間は真のドライバーではない」などと嘯きながら、安売りガスステーションを探している。

2. 「おー、ブレネリ、貴方のおうちは何処？……」

「私のおうちはScotlandよー。大きなEnglandの隣なのよ。ヤッホ、ホーツランランラン……」と言う訳で、300年間連れ添った連合王国の分裂騒ぎも、別れろ切れろは芸者の時に言う言葉、とばかりに元の鞆に収まったようだ。磐石だと思っていた大英帝

国でさえこの体たらく、考えてみると小生の幼少時から色んな国が分裂したり合併したり、消滅したりを繰り返している。東パキスタン、南ベトナム、東ドイツ、ユーゴスラビアが無くなっただけでなく、ソ連すら消滅した。しかしわが国とて例外ではない。

「富士は日本一の山」という歌（題は「ふじの山」。作者は巖谷小波）があるが、あれは風格・伝統が一番ということであって、高さが一番と言う意味ではない。今から120年前から70年程前までは、富士山より標高が176m高い山があり、日本国内の学校でも「標高は日本一の山」として教えられていたのである。台湾にあるこの山の名前は、昭和16年12月2日に発令された日米開戦の日時を告げる海軍の暗号にも使われたが、平成26年2月7日、中華民国山岳協会と日本富士山協会によって、玉山（旧名、新高山）と富士山の友好山提携が締結された。

3. 「入学したら驚いた」（その1）

医学部ってのは普通は立派な大学病院がデーンと居座っているものだが、M氏が入学した新設医学部には病院どころか、田圃の真ん中にあった医学部予定用地はまっ平らで建物の影はなく、地面はどろどろで田圃と大差は無かった。だいたい入学式が春ではなく11月5日だったのも珍妙である。

40年程前の話であるが9月に学生募集があり、10月に山形で受験したことも忘れた頃「合格です。手続きを」と通知してきた。あと4ヶ月後には通常の入試があったのだが「今入学手続きすれば1学年早く（6年制課程を5年5ヶ月で）卒業できる(!?)」と言うので入学してしまった。手続きをしなかった合格者はかなり居たようで、繰り上げ合格者を次々に出しても入学者は99人しか集まらず、うち山形県出身はたった1名だった。定員100名を割ると官

庁に叱られるのか、教養部キャンパスで授業が始まって1週間したら4名繰り上げ合格者が合流し103名になったが、4ヶ月後の春の入試後に8名が退学して95名になった。そういえば体育、語学の授業だけ受けて受験勉強に勤しみ、時々東京に模擬試験を受けに行っていた連中も確かにいた。M氏は5ヶ月在籍しただけで2年生になり、後輩も入学して行き場もなくなったので、あと5年間山形にへばり付くことになった。

退学した8名の人はどうなったのだろうか。1名は医者になるのを嫌って東京大学理Ⅱに入学、3名は1～2学年遅れて希望の医学部に入学、1名は某地方大学医学部を3学年遅れて卒業、と人伝てに聞いたが他の人については不明である。

4. 「年をとったら驚いた！」

……という本を読んだM氏は驚いた（著者は嵐山光三郎）。年をとることを大抵の人は悲しむが、嵐山氏は自身の若い時も含めて若者を揶揄しつつ、年をとるに連れて段々出来なくなることが増えて来るのを楽しんでいるようだ。

また嵐山氏は大学生の時に将来やりたいことを書き抜いている。列記すると、ツケで呑める行きつけの飲み屋をつくる、席に座るだけで好みのネタを出してくれる寿司屋をつくる、テレビ番組に出る、金のかかる愛人を連れてマドリッドで豪遊、純情な娘をかどわかしてパリに逃げる、深沢七郎オヤカタの子分になる、六本木に住む、サハラ砂漠縦断、本を1冊書く……77項目に及ぶ。

M氏は大学生になって間もなく、深沢七郎著『人間滅亡的人生案内』を読んでこういう人生観もあるのかと感心したが、子分になりたいとは露程も思わなかった。試みに嵐山氏に倣って、彼は思い出し出し医学生時代の目標を書き抜いてみた。A. 大学を卒業したら故郷の横浜に帰る、それが叶わなくとも白河の関よりは南下する。B. 巨乳で腰のくびれた女性と懇ろになる。C. ……ん??。D. ん??。これ以上思い浮かばない。例えば、イ. 30代で医学部教授になる。ロ. 3億円貯める。ハ. 愛人を3人囲う等の青年らしい夢さえも無く、希望をたった2つしか持たずして青春を過ごしていたとは、今になって悟ってもM氏の青春は実に哀しい。

5. よく考えてみたら……

- 昨年、いきなり「総選挙だー」というので「まゆゆ」にしようか「ぱるる」にしようか迷っていたら、総選挙はAKBでは無く、ABE総理の解散によるものであった。投票所でうっかり「さしこ」とか書いて投票した人はいないだろうか。
- 黒木華と蒼井優も顔が似ていると思ったが、二階堂ふみと宮崎あおいは激似であり、ポーズによっては判別不能である。イモトアヤコとジャンプの高梨沙羅のクリソツ度の比ではない。
- 「宇宙船」は地上400kmの高度をぐるぐる何ヶ月間も地球を回る。地球の直径は約12,700kmなので、400kmといえば直径の30分の1である。地球を直径10cmの球体とすれば高さは3mmになり、野球ボールの上を蟻が這いずってみたいものである。

6. 入学したら驚いた（その2）

山形は米も酒も果物も山菜料理も美味かったし、蔵王スキー場はすぐそばにあったが、愉快的出来事ばかりではなかった。スキーの骨折やバイクで事故って留年した人は確かにいたし、2学年下の厚木出身の人は不幸な事に雪道での交通事故で不帰の人となった。

またM氏は地元のミニコミ誌から「××の連載記事を書いてくれ」と頼まれた。超ミニコミ誌に掲載された彼の文章が目にとまったらしい。その誘いに少し乗り気になったが、記事が評判になって医学部教授の目にとまり、逆鱗に触れて揉めるのも本意ではないので彼は断った。「××」とはエロいテーマの1つであった。

今はスマートな山形新幹線「つばさ」が東京駅から1時間ごとに終日運行しているが、当時の特急「つばさ」(2本/日)はディーゼルカーだった。特急「やまばと」という電車(3本/日)もあったが、栃木県の黒磯では交流—直流の切り替えで室内は非常灯以外は真っ暗になり、その間しばらく惰性で走っていたのも「今は昔」である。

ひ弱なM氏の肉体には冬の寒さは過酷だったので「ほとんど冬眠」して過ごしていたが、入学時の説明の如く5年5ヶ月で卒業証書をくれ、3ヶ月後には医師免許も貰えた。有難や、有難や。

7. 20年間続いたよ

20年前のある日、薄緑色の薄っぺらな冊子を手にとると、^{いかめ} 厳しい顔をした会長らしき人の顔写真がはじめに出てきて、あとはクソ真面目な内容の記載が続いていた。「はっはは一、こんな本は誰も読まないねー」と思わず捨てそうになったが、ふと「誰も読まないだったら何を書いたって平気だ」と悟り、投稿してみた。その小冊子の表紙には「神皮第1号」と書いてあった。

連載の予定はなかったが某編集委員が「面白かったよ、次回も頼む」と言ってくれたので翌年も書き、また……、という訳で今日に至り、ある時期編集委員もやった。

「毒舌だ」「下品極まる」「シモネタ止めろ」とお叱りを受けることもたびたびだったが、何とか続いた。が、「20回続いたのなら飽きられる前にやめちゃおう」と悟った。

では前田アちゃん調の卒業の言葉「『おどろきモモの木クリニック』を嫌いになっても『神皮』を嫌いにならないで下さい」。

これからも好きな様に生きるしかない。例えば、バイアグラ、レビトラ、シアリスのイッキ呑みで腹上死……なんてね。それでは、ラミパス、ラミパス、ルルルルー。

(おどろきモモの木クリニック全20巻「完」)

私の道楽

*

高橋泰英●高橋皮膚科クリニック（横浜市中区）

落語の世界では男の道楽は「飲む・打つ・買う」、俗に「三ドラ（三道楽）煩惱」と言われています。酒を飲む、博打を打つ、女を買うということですね。あまり世間でよく言われないものばかりです。そこにいくと私の道楽は可愛いものです。人に押し付けるのはどうかと思いますが、興味があったら試していただきたいと思います。

まずは「アメリカンフットボール」。観るスポーツでこれほど面白いものはないと思いますが、ルールが難しいと敬遠される方が多いようです。確かに細かいルールはプロの監督でも全部把握していない人がいるくらいです。しかし初めはごく基本的なルールを覚えるだけで全く支障ありません。

9月から2月初めまでのNFL（アメリカのプロリーグ）開幕中は、週3回ほどNHK-BSで放送されます。ダイジェストなら、週1回日本テレビでも見られます。シーズン初めは初心者向けに解説されることが多いので、見ながら覚えていけるとと思います。

緻密な作戦と激しい肉弾戦、そしてスピード、超美技の連続。コンピューター並みの頭脳を持った白

鵬達とウサイン・ボルト達がぶつかり合うようなものです。観ない手はありません。ともにアメリカ生まれのスポーツである野球との共通項として、プレーとプレーの合間に時間があるので次の作戦を自分でも想像する楽しみがあるのも魅力です。

実は自分の周囲でアメフトファンがいないのが悩みで、何とか神皮会員を引きずり込んでやろうというのがこのお勧めの趣旨でもあります。元々ファンの方、新たにファンになった方、例会後の情報交換会でアメフトを語り合ひましょう。最後に、心の平安のためには最良チームを作らない方が無難です。

次いで「落語」。以前杉田泰之先生が落語を題材にエッセイを書いていましたが、そこで師匠と呼ばれたからには落語を語らないわけにはいきません。自分の頭に出来た池に身を投げて自殺する話、行き倒れになった自分の死骸を引き取りに行く話、胴切りにされた上半身が湯屋の番台に座り下半身は蒟蒻屋で芋を踏んでいるという話など、シュールで馬鹿馬鹿しいものから、ほろっとさせる人情話、あるいは怪談話までじつに様々な話があります。しかも演者によってかなり違う印象を受けるのも、飽きない

理由です。世界にも例のないユニークな話芸を一度は味わってみて下さい。

さらに日本酒のお好きな方は、その後で呑みに行くといつもの3割から5割増しで美味しく感じるはず。2、3席聞くとお酒を飲むシーンに出くわすことが多いので、喉が鳴ること請け合いです。

落語を観るのは寄席に行くことだと思っ方いると思いますが、初めはあまりお勧めできません。寄席に出ているのは玉石混淆、うっかりつまらない噺家に当たった日にゃ落語自体がつまらないと思われてしまいます。それは悔しい。まずは上手い噺家、面白い噺家の独演会がお勧めです。神奈川では桜木町野毛の「にぎわい座」で主に月の前半に数日、県民ホールでは主に後半に月1回誰かの独演会をやっています。たまに逗子・鎌倉でも開かれることがあります。東京なら毎日どこかで必ず誰かの独演会があると思っ方がいいくらいです。落語の面白さがわかったら寄席に行って、色々の噺家の中で自分の好みを探すのもいいと思っますが、忙しい皆様には効率が悪すぎるかもしれません。若手中堅の真打でお勧めの数人を紹介しておきます。

- ・古今亭文菊：風貌・所作・語り口、どれをとっても老人、昭和の名人の生き残りという風情の36歳。よく見りゃ端正なかわいい顔をしています。
- ・三遊亭萬橋：古典を自分流にアレンジすることが多い。失敗することもあるが、知っている噺も新鮮に聞ける。汁けが多いので最前列は避けよう。
- ・三遊亭兼好：とにかく明るく笑わせる芸風、高座に上がる時も降りる時もずっと笑顔なのはこの人だけ。帰る客もみな笑顔。
- ・入船亭扇辰：笑いの少ない噺を最後まで飽きさせずに聞かせる話芸は絶品。新潟生まれなのに、言葉遣いに鱗背な江戸っ子を感じさせる。
- ・立川談春：平成の名人と称され今最もチケットが取りにくい噺家の一人。まだ打率は低いと思っが当たったら場外ホームラン。「らくだ」「文七元結」は他の噺家のを聞きたくなくなったほど秀逸。
- ・桃月庵白酒：握り飯のような顔と体からは想像もつかない美声の持ち主、女性を演じると目をつぶればたいそう色っぽい。古典の型を壊さない

のに現代的。この人の高座でつまらなかった記憶がない安定感。私にとって「平成の名人」はこっち。

まだまだ聞いてほしい噺家（柳家小三治・柳家さん喬・瀧川鯉昇・柳亭市馬・柳家喬太郎・春風亭昇太・立川生志・立川談笑など）はたくさんいて、ある意味、今は落語の絶頂期と言ってもいいと思っます。そんな現在を生きていて落語を聞かないのは、実にもったいない。生を聞きに行く暇のない方には、故古今亭志ん朝ならCD・DVDがたくさん出ているのでそれをお聞きいただきたい。実は古今東西の噺家で一番好きなのがこの人。これを聞いても落語が好きにならない方には、それ以上勧めるのは諦めます。

さらに「映画」。まず総論的なお話しをします。何を観るか、あなたの選択基準は何ですか？好きなジャンル、好きな俳優が出ている、というのが一般的だと思っます。もちろんそれも正しいと思っますが、好きな監督を見つけるというのはより効率が良いと思っます。それに人に語る時にちょっと映画に詳しいと思われ、恰好をつけられますね。ただしあまり突っ込まれるとほろが出るのでご用心。

監督についての裏ワザとしては、ハリウッド映画でアメリカ人以外の監督を見つけたら本国で撮った前作を見ること。古くは有名なアルフレッド・ヒッチコック、ちょっと古いところでダニー・ボイル、ガイ・リッチー、最近ではアレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトウなど。米国以外で優れた作品を撮るとすぐにハリウッドに招かれます。多くはハリウッドデビュー直前の作品の方が面白いので、それを見ることをお勧めします。

また、ハリウッドでリメイクされた外国の作品は元の方がいいというのも確かです。香港の『インファナル・アフェア』と『ディパーテッド』、スペインの『オープン・ユア・アイズ』と『バニラ・スカイ』、日本の『Shall we ダンス?』と『Shall We Dance?』、韓国の『イルマーレ』と『イルマーレ』、スウェーデンの『ミレニウム ドラゴン・タトゥーの女』と『ドラゴン・タトゥーの女』等々。

国別ではドイツ映画が圧倒的に面白い確率が高いです。日本で封切られる本数がとても少ないのですが、配給元が厳選しているので駄作がないのかと思

像しています。かなり下がって次点は韓国映画とイギリス映画、損した気がしたことが少ないように思っています

最後に最近数年のお勧め映画をご紹介します。ヒューマンドラマなら『最強の二人』。ハンググライダーの墜落事故で四肢麻痺になった富豪とその介護人の交流を描いたフランス映画で、実話がもとになっています。不自由な体のためひどく偏屈になった富豪の心を、身障者に対して全く気を使わず普通に接する移民出身の介護人が解きほぐしていきます。痛快かつ安らぎます。

サスペンスなら『鑑定士と顔のない依頼人』。天才美術鑑定士が、両親の遺した美術品の査定を依頼されるが、その女性は決して顔を見せない。すみません、題名のままの説明ですね。初めは謎解きの面に引き込まれますが、ある意味究極の恋愛映画という一面もあるので、そう思わなかった方はもう一度見るとまた味わい深いです。有名な『ニュー・シネマ・パラダイス』の監督です。彼の主人公はいつも何かに夢中になっていくようです（こんな感じで監督の名を出すと、通っぽく聞こえませんか？）。

SFなら『ゼロ・グラビティ』。スペースシャトルの修理中に宇宙空間に放り出された女性の、地球に生還するための苦闘を描く。本来素晴らしい映像を映画館で見るといいのですが、DVDでもその片鱗は味わえるはず。ただしもう一つの重要な要素である「無音」は是非確保してほしい。

ラブコメディなら『ラブ・アクチュアリー』。2003年作なので最近とは言い難いのですが、まず初めにお勧めする恋愛ものならこれになります。イギリスの有名な俳優がたくさん出てきて、初めは戸惑うかもしれませんが、それぞれ個性的なので見分けがつくと思います。群像劇では顔の区別がつかどうか、重要なポイント。演出以前にキャスティングが大切ですね。9組の物語のオムニバスですが、皆さんはどの話が気に入るのでしょうか？ 私は結婚式のビデオの話、小説家とポルトガルのメイドの話、ロック歌手とマネージャーの話が好きです。

ホラーなら『エスター』。怖くて思い出したくないので、内容は省略します。

アクションなら『パリより愛をこめて』。ジョン・トラボルタ主演だがフランス映画。ひたすら派手なアクションの洪水がこれでもかと押し寄せます。頭

をバカにして、流れに身を任せてください。古い映画ファンなら、題名の由来はお分かりですね(?)。諜報部員が主役という以外無関係ですが。

最後にお勧めしたいのは「本」。まず、ちくま文庫、前野隆司著『脳はなぜ「心」を作ったのか「私」の謎を解く受動意識仮説』です。工学博士の書いた脳科学の本です。工学博士がなぜ脳の話をしてもらえるのでしょうか、ロボットに心を持たせられるかということで、この分野を研究するようになったそうです。この本では「私＝心の中心(?)」というものの本質について述べ、最終的には哲学・宗教（特に東洋的な世界観との共通点）・生物の来し方行く末という壮大なロマンを語っているのですが、なぜか優れた推理小説を読んだ時のような読後感があります。推理小説の解説の常で、内容について詳しいことは省略させてもらいます。科学的にきちんと証明されていないことで論理を進めている部分もあるとは思いますが、私が幼い頃から抱いていた疑問・不安などに、ある程度の解決・安らぎを与えられた思いがしました。私は無宗教であり、あまり物事を突き詰めて考えないので説得されてしまったのかもしれませんが、生涯忘れられない1冊になりそうです。ついでに、彼はコンピューターないしロボットに心を持たせられるのは時間の問題であると述べています。

次にハヤカワミステリ文庫、ステイーグ・ラーソン著『ミレニアム1. 2. 3』。これは世界的ベストセラーになったので、すでに多くの方がお読みになったと思いますが、まだという方は是非お読みください。第2部の解説から引用すれば、「第1部は孤島ミステリー&サイコ・スリラー、第2部は警察小説&復讐小説、第3部はスパイ・スリラー&リーガル・サスペンス」ということになります。つまり、「この3部作はミステリーのあらゆる要素がぎっしり詰まっている」というわけです。この小説の優れている点は、筋立てが巧妙なことは当然として、登場人物が端役に至るまでキャラが立っており、そのため話にとってもリアリティを感じることです。さらに邦訳がとてこなれていて、翻訳物の読みにくさがないことも特筆に値します。詳しい内容には触れられませんが、私が最も気に入ったのは、第1部で1枚の写真から犯人を割り出していく場面です。一

度読みだしたら止まらないので、長期休暇の時に
読みいただくのが賢明です。

さらに、草思社文庫、ジャレド・ダイヤモンド著『銃・病原菌・鉄』と『文明崩壊 滅亡と存続の命運を分けるもの』も世界的ベストセラーなのですが、私の周囲で聞いてみると意外と読んでいない人が多いのであえて取り上げます。前者は、人類の文明がなぜユーラシア大陸で発達したのか、特にそれが人種による優劣とは無関係な地形的なことが重要な原因になっていることを導き出しています。「脳…」の時と同じで、そんじょそこらのミステリーでは太刀打ちできない謎解きの興奮を味わえます。後者は言ってみればその裏返しで、イースター島・グリーンランド（ここにかつて文明があったこと自体知り

ませんでした)・マヤなど一時栄えた文明がなぜ崩壊したのかを読み解き、これを基に現在の文明の未来を予想しています。さらにそれが崩壊しないためには我々がどうすればよいかを示唆しています。今我々が享受している文明が減ぶということは想像がつかないですが、かつて崩壊した文明の住人もおそらくそう思っていたはずです。それぞれの文明に自分の身を置いてみると、背筋が寒い思いがします。

色々取り留めもなくご紹介しましたが、もし次回ということがあるなら今度は映画を中心に、是非という本がある時はそれをご紹介していきたいと思えます。

